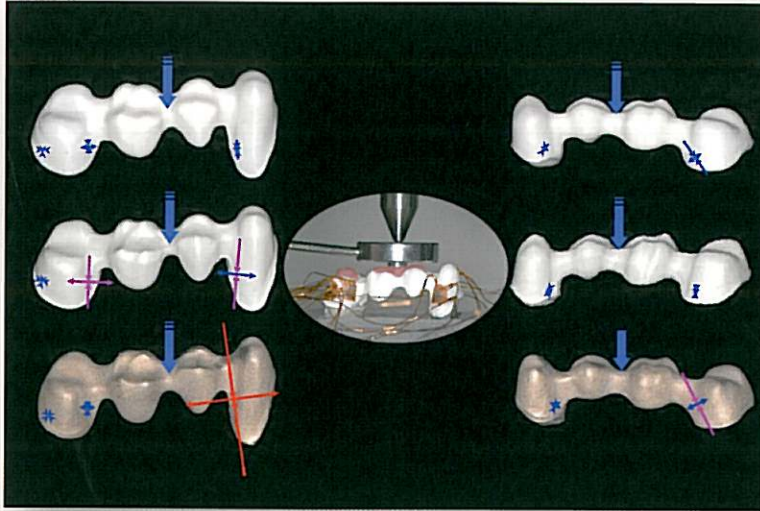


日本歯科評論 11

NOV. 2010
No.817
Vol.70(11)

THE NIPPON **Dental Review** <http://www.hyoron.co.jp>



東京医科歯科大学大学院医学総合研究科
摂食機能保存学分野
岡田大蔵先生・野崎浩佑先生・三浦宏之先生
<私の研究室から>本文9頁

特集

歯周治療におけるチームアプローチ

——歯周治療の総合力を向上させるには

- 歯周治療のチームアプローチの必要性 / 清水雅雪
- チーム医療としての歯周病患者への対応
——歯科医師と歯科衛生士のコラボレーション / 鈴木美智代・矢吹義秀
- 侵襲性歯周炎の一症例
——患者さんとの対応(コミュニケーション)に悩まされた経験から / 榎美子・佐藤勝史
- インプラント患者の術前・術後の管理——歯科衛生士が関わる意義 / 鈴木温子・高島美佐代・内田剛也
- インプラント上部構造を歯周組織と調和させるために
——当院における歯科衛生士・歯科技工士・歯科医師の取り組みから / 小野舞子・楨原 準・飯田倫太郎
- 高齢化社会における年齢に応じた歯周治療
——注意すべき全身疾患と治療薬を中心に / 柿沼八重子・亀田行雄

いま求められる口腔成育の視点から

成長発育期の矯正歯科治療において 一般歯科医と共有したい成育理念

第1回 不正咬合をどうとらえるか / 伊藤智恵

私の“専門医”への道のり——日本口腔インプラント学会②

インプラント治療をよりよいものにするために / 今西恒夫

“DH” あなたの番です!

重度歯周病患者に対する口腔ケアの重要性とメンテナンス

/ 加納真弓・水上 克

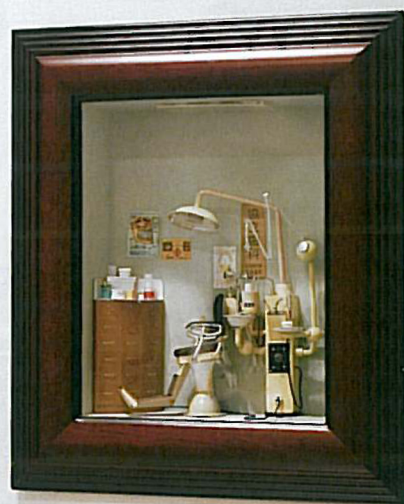


臨床歯科医の独り言

プロフェッショナルリズムと ポピュリズム

なか はら えつ お
中原悦夫

医療法人社団協立歯科 クリニック デュボワ
〒100-0011 東京都千代田区内幸町1-1-1 帝国ホテルプラザ4階



映画『告白』を題材にしたディベートが東京の品川女子学院で行われ、私も参加した。東京の杉並区立和田中学校の元校長である藤原和博氏が司会となり、高校1年生の希望者を募った課外授業に、主演女優の松たか子さんと監督の中島哲也氏をはじめとする数名の大人が混じり、マスコミも一緒に参加しての『特別授業』というイベントだった。前半のテーマは『告白』の中で描かれている“復讐の是非”についてであり、後半はそれを司法における“裁判員制度”にまで広げて討論された。どちらのテーマにおいても、大人顔負けのコメントが生徒たちから飛び出してくるのが印象的だった。

ディベートのクライマックスでは、“裁判員制度の効用”を巡って傍聴している観客も含め会場にいるすべての人が動員され、「期待できる」と「期待できない」のグループに分けられた。筆者はこ

れまであまり裁判員制度に関して深く考察したことがなかったが、直感が働いて「期待できない」ほうに移動したら4：1の少数派だった。直感で動いて後から理論構成を考える、といういつもの癖が出てしまった。

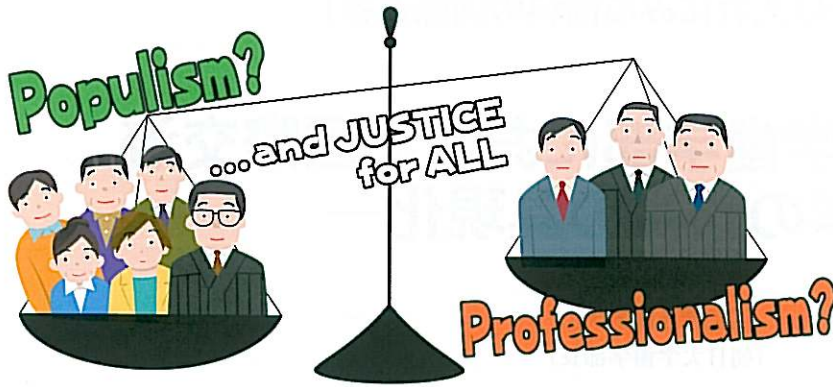
人類初のプロフェッショナル
は医療と司法に携わる
人たちだった

人の命に関わる医療と人生に関わる司法は、古代ギリシャやローマにおける都市国家が起源とされている。すなわち、“ヒポクラテスの誓い”はプロフェッショナルの原点である。プロフェッショナルリズムといってもその概念は大学では教えられていないし、プロフェッショナルリズムの崩壊といっても何が崩れたのかすら理解できないかもしれない。

「プロフェッショナルが厳しい修練や掟と引き換えに得ることができる第一のものは、自由であ

る。そしてインディペンデント性と表裏一体の関係で得ることができるのが、組織に帰属しなくても生きていけるという安心感である。プロフェッショナルは、自分の仕事が生み出す価値の源泉がすべて自分自身の内にある」と、波頭 亮著『プロフェッショナル原論』（筑摩書房）に書かれている。

医師法や歯科医師法はこれを保障するが、われわれの存在は保険医に登録した段階で規制の対象となるため、自由度が損なわれている感は否めない。波頭氏によれば、コンサルタントという新しい職業の“プロフェッショナルとしての心構え”を自ら律して原論として書き下ろしたが、本の感想を送ってきた読者の大半は医師であり、「頻発する訴訟や一連の医師叩きに疲れて医師を辞めようと思ったが、この本のお陰でもう一度考え直す勇気を得た」等の便りが多かったと聞く。



プロフェッショナリズムの崩壊とポピュリズムの台頭

「〇〇先生がおっしゃるのだから間違いないよ!」「あの先生がやって駄目なときはしょうがないよ!」「〇〇先生の言うとおりにしていれば、大丈夫だよ!」——かつての患者の声が懐かしく感じられる。皆が身体のことはずべてお医者さんに任せっぱなしにして、医者が町の有識者としてのご意見番の役目も担っていた時代では、“医者”に威厳があり、厚い信頼が寄せられていた。

アナクロニズムな幻想を抱いているのかもしれないが、患者は今でも“本当は医者にすべてを任せたい”と思っているのではないだろうか? インフォームドコンセントという言葉を患者自身が用い始めた頃から、医師に対する信頼の失墜、つまりプロフェッショナリズムも崩壊し始めた。絶対的信頼を集めていた医療に、それを担う医師や歯科医師に対する信頼を揺るがす要因を、われわれプロフ

ェッショナルが作り出してしまったのだ。そして非難の声が上がり、メディアが煽り、司法が裁き、ネットを駆け巡る。大衆が瞬時に情報を得て物申す時代となった。

皆が医者から十分に説明を受けられない時代、患者にじっくりと丁寧に説明してあげると、それだけで大変喜ばれた。今は、リスクも含めて徹底的に説明しておかないと、後で「聞いていなかった」と文句を言われるだけでなく、「説明義務違反!」とさえ言い出しかねない。以前に説明したことがあっても患者はすぐに忘れてしまうので、書面で手渡す努力をしているものの、すぐになくしてしまい、もらったことすら覚えていないこともある。説明して、手渡して、署名をもらって記録を残して……と責任回避作業に追われても、医療の本質から遠ざかるだけで、医療の質の向上には何も貢献できないのだ。さらに、“患者本人が理解し納得した上で医療を受けているのだから”と医者との信頼関係が確立されているのかと思いきや、

家族や友人、あるいは他の医者の一言でたちどころに暗転させられてしまう。ポピュリズムが台頭し、患者自身も大衆迎合せざるを得ない世の中になってしまったのだろう。

患者自身、説明された内容自体は理解できても、医者レベルの理解には程遠いはずである。それにもかかわらず、治療方針や治療方法を自分で決めていかなければならない。しかも、説明を受けた内容の中から……。選択肢を増やそうとセカンドオピニオンを求めるあまり、より迷いを増やしてしまうことのほうが多い。挙句の果てには、医療の本質的な内容や医者の意見よりも、同じ悩みを抱える患者や友人の意見、ネット上のコメントなど大衆の意見を尊重して、感情で意思決定をしてしまうことも多々あるように思われる。

*

われわれ医師や歯科医師の診断にセカンドオピニオンやネットで一般人が参加する現況に、弁護士や裁判官の判決に裁判員として一般人が参加する司法の現況が被る。広く意見を求めることに全く異論はなく、論理的にも納得のいく風潮であり制度であることには間違いない。ただ、裁判員制度や今の世の中の風潮が、“本当に効用の期待できるものなのか”と心にじっくりしないところがある私は少数派なのだろうか?